

[書 評]

フランス バカンス事情

André Rauch 著

鈴木正昭

【はじめに】

高度経済成長以後、わが国でも休日と収入の増加によって余暇活動が活発になった。とりわけ近年の外国旅行者数の増加には目をみはるものがある。年間一千万人を突破したのはずいぶん昔のことである。それに伴い「洋行」などという言葉はほぼ死語になったといっても過言ではない。筆者が学生時代だった 1960 年代後半でも外国旅行はまだまだ高嶺の花だったことを思うと隔世の感がある。

余暇といい休暇といっても、わが国ではフランスをはじめとするヨーロッパ諸国とは異なり、盆暮れやゴールデンウィークの休暇もせいぜい 1 週間前後で、土曜日曜を含めても 10 日間程度に過ぎず、長期滞在型の休暇を過ごすことは不可能であろう。日本人の旅行がとかくあわただしい印象を内外の人々に与える原因の一つは短い休暇期間にある。

本書は「フランスのバカンス」というタイトルを持っている。バカンスというフランス語はわが国ではすでにそれなりの市民権を得ていると言っていい。それにもかかわらず書名に「バカンス」という言葉が用いられることはきわめて稀である。「季刊書名ナビ」という最近 27 年間に出版された 110 万以上の書名タイトルを集めた CD・ROM (98 年 1 月号) で検索してみたところ、「バカンス」という語を含む書名はわずか 8 タイトルである (ヴァカンス表記のもの 3 タイトル、バカンス表記が 5 タイトル)。しかもこれらはすべて小説のタイトルであり、研究書やエッセイなどにこの言葉を用いたものは皆無だった。

「余暇」とか「レジャー」という言葉をそのタイトルに含む書籍はそれぞれ 71, 84 であることと比較してもあまりにも少ないと言わねばならない。バカンスという語にはどこか硬い書物のタイトルへの使用をためらわせるものがあるのだろうか。

事情はインターネットでも同様だった。日本語版の「ヤフー」で検索した

ところによれば、ヴァカンス表記が7件、バカンスが2件であるのに、余暇は16件、レジャーに到っては446件の多きを数えた(1998年3月21日現在)。ただしこれは見出しの数ではなく、見出しの説明文中にこれらの語が用いられている回数である。英語のヤフーでの検索結果も同様だった。(3月23日現在) vacance にはわずかに15件しかないのに対し、日本語の「余暇」や「レジャー」にあたる recreation や leisure は実に2,935 および 983 という数を示している。そして vacation では実に4,051件の多きにのぼる。これがインターネットの世界における英語の圧倒的優位によるものであることは疑いをいれない。ちなみに何冊かの英和辞典にも vacance という語は記載されていない。英語圏ではバカンスと言う語はあまり用いられないのであろうか。

ところで、これらの言葉の意味するところはそれぞれ重なり合いながらも微妙に異なっている。それぞれの語を正確に定義することは本稿の目的ではないが、余暇やレジャーの方がバカンスより広い意味を持っていることは確実である。数時間の余暇はありえても数時間のバカンスはありえないからである。バカンスというのは相当長期の休暇を指す言葉であるのに対し、余暇やレジャーは短期長期に係わりなく使用してさしつかえない言葉である。

本書の著者はストラスブール第二大学教授でバカンスの歴史や、バカンスでの人々の行動を主たる研究テーマにしている。詳しい履歴は不祥であるが、これまでの業績としては「身体への関心」(1983年)、「バカンスと肉体の鍛練」(88年)、「20世紀の暴力、ボクシング」(92年)などがある。

本書は「1830年から今日までの」という副題を持ち、ナポレオンの失脚とウィーン会議後の王政復古時代から1990年代半ばまでのおよそ160年という長期間をその対象としている。わが国の歴史で言えば近海に頻繁に出没する欧米諸国の艦船により鎖国体制が、(ということは幕藩体制が、ということと同義であることが事態の進展とともに明らかになってゆくのだが)揺さぶられはじめた頃から現代までがその記述の対象とされていることになる。

上に見たように、バカンスとはある程度長期にわたる休日の謂いである

が、それが庶民レベルで問題になるのはそれほど古いことではない。ついこのあいだまで、盆暮れ以外はほとんど休みなしに働くことはけっして稀ではなかった。現在でもわが国では週休2日制すらすべての組織で実現しているわけではないし、休暇がなかなか取れないというサラリーマンの嘆きは誰もが耳にしたことがあるのではないだろうか。

洋の東西を問わず「貧乏暇なし」という言葉がつい最近までの大方の庶民の生活を要約する言葉だったといっても過言ではない。余暇はきわめて稀にしか与えられなかった。ましてよほどの必要に迫られないかぎり人々は生まれた場所を離れることはなかった。そして旅は苦しいものである、という常識はいずこも同じだった。西洋でも馬車による旅は道路の未整備のためもありけっして快適なものではなかった。わが国では古来旅立つ人と残る人は水杯（みずさかずき）を交わすならわしがあつた。また「かわいい子には旅をさせろ」ということわざもあつた。しかし水杯などという言葉は若い人にとってはもはや死語であろう。後者の意味は若いうちに苦勞をさせることが成長に役立つ、という意味で用いられていたのである（今日ではかわいい子供には楽しい旅行をたくさんさせてあげましょう、という意味で用いられる場合もあるそうである！）。古くから用いられた言葉が消滅したり、意味が正反対になったことは旅行に対する認識に大きな変更が加えられたことを意味している。

本書は四部からなっている。第一部は七月革命のあつた1830年から第一次大戦終了時の1918年まで。二部が20年から50年まで。当然のことながらこの間には第二次大戦が挟まれている。三部は50年から75年まで、四部はそれ以降今日までである。

【第一部】

第一部は非常な長期間を一つの章におさめているが、これはまたこの間バカンスのありようにそれほど大きな変化がなかつたことを示している。第一次大戦までは徐々に衰えを見せはじめていたとはいえ、世界は「パックス・

ブリタニカ」の秩序の中にあつた。当然のことながらあらゆることにおいて英国流が世界を風靡したのであり、バカンスに関しても事情は同じだった。

英国南部の海岸に貴族たちが集い、社交界も一時的にここに移動した。するとここにホテルが建ち、あそこに食堂が、あちらにはカジノがという具合に今日の観光地の原型ができあがっていったのである。フランスの初期のバカンス基地になつたのは、ドーヴァー海峡を挟んで英国の避暑地と向かい合う北部の町ブローニュとかディエップなどである。王政復古時代には7月になると宮廷自体がディエップに移動した。リュック・シュール・メールヤトウルーヴィルが上記二都市に次いで発展した。その他ロワイヤン、カレ、ラ・ロシェルなどもほぼ同時期に開発された保養地である。これらの土地が最初に発展したのは、パリから近いという点と鉄道の便がありアクセスが容易だったという点にある。

モビリティの低い社会においては近いという点がなによりも重要である。鉄道ができるまでは馬車で12時間かかったパリとこれらの観光地は、鉄道の開設により4時間に短縮された。ビスケー湾に面したアルカションまで鉄道が通じたのが1857年、ピアリッツまでの開通が1860年である。そして地中海に面したニースへは1864年のことだった。わが国でも伊豆、箱根、日光など東京から比較的近距离にある風光明媚な場所が古くから開けた観光地になつたのも事情は同じである。

こうした海岸のリゾートとほぼ同時期に内陸部にも保養地が誕生した。言うまでもなく温泉の湧く場所である。具体的にはヴィシーとかエクス・レ・バンなどである。1860年にニースがフランスに併合されると、ここには外国の王侯たちが多く訪れるようになった。ニースは当初から国際的な観光都市だったわけである。北欧の人々にどって地中海は古くから陽光溢れる理想境だった。ニースの後にはカンヌやマントンが続いた。現在これらの都市が並ぶ海岸はしばしばコート・ダジュールと呼ばれ、わが国の観光雑誌などでもすっかりお馴染みになつたが、これはアカデミー・フランセーズ会員だったステファンヌ・リエジャールの命名によるのだそうである。

当初のバカンスは今日のバカンスとはいくつかの点で異なっていた。まずこれは多くの場合治療、健康増進目的だったこと、またこうした湯治に長期間出かけることのできた階級は限られていたことなどである。湯治目的のためとはいえ、貴族やブルジョアジーの滞在地ともなれば、滞在先の快適さがあらゆる点で追求されたのは当然のことだった。

イッポリート・テーヌは1855年のある湯治場を次のように描写している。「晴天に恵まれた日には人々は戸外で過ごす。英国庭園と呼ばれる小さな牧場のような場所が山と道路の間に広がっている。(……)ご婦人方はおしゃべりをしたり、仕事をしたりするためそこに集まってくる。伊達男は椅子の上からねころがって新聞を読んだり、さかんに葉巻をふかしたりしている。刺繍の縁取りのあるズボンをはいた少女たちは気取った動作で、優雅にしなをつくりながらべちゃくちゃしゃべっている。」

これは今日でもあちらこちらの避暑地で見かけられそうな光景である。湯治とはいえ、すべての時間が治療や療養に費やされるわけではない。忘れてはならないのはこうしたのどかな休暇を享受できたのは第一次大戦以前においてはきわめてわずかな人々に限られていたことである。著者がこの時代には湯治場そのものがステータスシンボルだった、と述べている所以である。パリの社交場の延長としての保養地なのであるから、そこに出入りできる人も自ずから限定されたわけである。

やがて首都と各地を結ぶ豪華な列車の運行が開始され、より快適な旅が約束されるようになった。オリエント・エクスプレスを始めとする、高級感を極限まで追求した鉄道を思いうかべてみるだけで十分であろう。

こうした保養地では当初人々は、とりわけ女性はみずからの肉体が人目に触れないよう馬車に乗ったまま海に乗りいれた。馬車の利用が廃止された後も女性の水着は今日では想像もできないほど体全体を覆っていたので、まるで服を着たまま泳いでいるように見えたことなど、まだ多くの人の記憶に残っているに違いない。

当然のことながら当初はこの程度の露出度でも強烈な刺激をとりわけ男性

に与えたようで、海水に漬かる女性を眺めるため人垣ができたほどだった。こうしたところから「自らの裸身をさらすことは健康とか身だしなみに注意を払うことにつながった」と著者は述べている。隠すことから美しい肉体を誇示する方向へと人々の意識が変わっていったのである。こうした無遠慮な視線からの防御のためであろうか、当初は男性用、女性用、家族用と水浴の場所が三個所に仕切られている海水浴場もあった。

これらの有名な保養地の変遷の経過について、著者はドーヴィルを例に挙げている。パリの英国大使館勤務医だったオリフ博士は 1859 年に銀行家ドノンの援助を受けて 240 ヘクタールのトゥックの左岸の湿地や砂丘を購入した。4 年後に整備されて分譲地として売り出されたときには、単位面積当たりの販売価格はおよそ購入時の 30 倍にもなっていた。このようにして新しい避暑地や保養地が続々と建設されていったのである。

人々は温泉に入ったり、水浴をしたりする他にはどんなことをしていたのであろうか。もちろん先に挙げた例のようにおしゃべりをしたり、寝転がって新聞を読んだりもしたであろう。しかしそれだけでは暇つぶしにけっして十分とはいえなかった。釣り、舟遊びは海辺には当然のお遊びである。子供相手にはギニョルやお遊戯の時間。夕べの野外コンサート、ここではロッシニーのような大家が自ら指揮棒をとる場合さえもあった。もちろん音楽を聴きながら夕食をとることも珍しくなかった。夜になればまたコンサート、芝居、舞踏会など盛りだくさんな娯楽が提供された。

温泉を中心にした保養地では娯楽の中心はカジノだった。カジノといってもそこで提供されるものは賭博に限定されていたわけではない。家族そろっての滞在客も多いので、女性や子供向きの施設、設備も当然のことながら用意された。これらの保養地ではシーズン中有効の入場券が発売され、それを入手することにより各種設備の利用権が手に入れられる仕組みになっていた。例えば有名なヴィシーではこの券の購入者はゲーム室、ビリヤード室、読書室、舞踏会への入場やヴェランダ、庭園の利用、コンサート会場への入場などの他、椅子の無料利用権などを与えられた。椅子に座るのに金がかか

るというのはわれわれには不可解であるが、フランスではしばしば見られる光景である。

オペラの夕べには例えばサラ・ベルナールのような名優も出演した。夏になるとパリの演劇界、音楽会もその活動の舞台を海辺や温泉のある保養地に移した。観光地の見世物という言葉から今日われわれが思い浮かべるようなお粗末なものではなく、本格的な芝居、音楽がこれらの土地では提供されていた。バカンスが限られた人々のものであればあるほど、いい加減な見世物では洗練された趣味を持つ人々の要求に応じることはできなかったのである。

【第二部】

第二部は第一次大戦終了後の1920年から第二次大戦終了後間もない50年までがその対象である。この時期には当然のことながら社会の主役に大きな変動が生じた。それに伴い人々の保養地の好みにも大きな変動が発生した。従来はノルマンディーの海辺の保養地がその中心を占めていたのに対し、大戦後は地中海沿いのいわゆるコート・ダジュール（紺碧海岸）へとシフトしていった。こうした変化の「牽引車」となったのは芸術家、画家、作家、パリの役者といった人々で、大戦前とは明らかに階層が入れ替わっていることがわかる。大戦前にはこれらの人々は保養地を訪れ、貴族や大ブルジョアの前でその芸を見せる側だった。主役の交代は庶民にも大きな刺激を与えた。新たな主役たちは庶民により身近な階層の人々だったからである。貴族や大ブルジョアは庶民とは隔絶した人々だったから、庶民はバカンスなど自らには無縁のものと考えていたのである。それが主役の交代により、バカンスがわずかではあるが身近なものになったのである。

山岳への旅行は海辺や温泉地への進出にやや後れを取った。しかしながら健康のためハイキング等で高原を訪れる人も徐々に増えていった。他の多くの分野と同じくここでもイギリスがその先鞭をつけた。そして1870年代に

入るとフランスにも登山クラブが相次いで設立され、本格的なアルピニズムの時代を迎えた。いわゆるウインタースポーツも大体この時代に始まっている。リュージュ、ボブスレー、カーリングのコースが最初に開設されたのはスイスのサン・モリッツで1864年のことである。

フランス最初のスキークラブができたのが1896年のことであるから、フランスのウインタースポーツはまだわずか100年の歴史しか持っていないことになる。ウインタースポーツの普及につれて、当然のことながら冬季に山を訪れる人は増大の一途を辿った。たとえば1912年以来メジェーヴには4つのホテルが存在していたのであるが、当初これらのホテルは夏季のみの営業だった。19年から20年のシーズンでも冬季も営業したのはこのうちのわずか2軒に過ぎなかった。

24年にシャモニーで開催された冬季オリンピックはウインタースポーツの発展にとってエポックメイキングな出来事だった。以後ただ山を眺めるだけというよりは、スポーツのために山を訪れる人が著しく増加した。大規模宿泊設備の建設が相次いだ。クリスマス休暇を山でスキーをして過ごすことが流行し、37年の休暇には実に51本の特急や急行がパリのリヨン駅からアルプスに向かった。およそ25,000人というのは現在から見ればたいした数ではないけれども今から60年以上前であることを考えれば驚くべき数であるというべきであろう。

人民戦線の勝利によるレオン・ブルムの政権の成立は、バカンスの普及にとって大きな出来事だった。有給休暇法案が下院で成立をみたのは1936年6月のことである。賛成563票、反対1票という圧倒的多数で成立をみた。もっともこれ以前に有給休暇がまったく存在しなかったわけではない。いかなる法律といえども、ある程度社会的に承認された事実を追認する場合は多いのはわが国も同様である。20世紀初頭以来有給休暇の法制化が一部で主張されていたのであるが、大方の賛同を得ることができなかった。それに加えて29年、ウォール街から始まった大恐慌によりバカンスどころではなくなってしまった。それが人民戦線政府の成立により実現をみたわけである。

しかしながら、法律が成立したからといって人々の意識や行動が直ちにそれに合わせて急激に変化したわけではなかった。しかもそうこうするうちに第二次大戦が始まったため再びバカンスどころではなくなってしまったのである。大戦終結の翌 46 年にはバカンスに出かけた人は 37 年とほぼ同数であったが、47 年にはそれを超えた。本格的な離陸は 48 年からとされる。バカンスに出かけた人の数から見る限り、フランスの大戦からの立ち直りは意外に早かったといえるだろう。とはいえ、これとて労働者階級がこぞってバカンスに出かけたわけではないことに注意しなければならない。当初彼らは家族揃って自転車で近在に出かけたり、汽車やバスに乗って遠足に出かけたりするのがせいぜいのところだった。人民戦線政府による有給休暇法案の意義はともかく、これによりフランス人の余暇活動が直ちに劇的に変化したわけではない、と著者は主張しているように思われる。

第一次大戦後、戦争で痛めつけられた子供たちの肉体や心を癒すことをその主要な目的とし、アメリカの影響下にボーイスカウト活動が盛んになった。当初この運動を担ったのはカトリック系、プロテスタント系の教会だった。それぞれの組織とも 12 歳以下を対象とするカブスカウトとそれよりも年長者を対象とするボーイスカウトから成り立っていた。1937 年のアムステルダム近郊で開催されたジャンボリーには世界 44 カ国から 33,000 名の団員が参加した。フランスからも 2,000 名が参加した。

この運動が野外活動に重きを置いた点に、著者は進行する都市化現象に対する危機意識の発露を見ているが卓見であると思う。当初は男子のみを対象としたこの運動が、やがて女子をもその対象として取り込んでいったことは言うまでもない。ここに集った若者たちは山や野原や森における団体行動を通じて社会的適応をはかったわけであるが、そこへの移動にも極力近代的な移動手段を用いないで徒歩によることが目指されていた。そしてボーイスカウトが先鞭をつけた学童の野外活動は、やがて一般の学童にまで及んでいったのである。

【第三部】

第三部では 1950 年から 75 年までが扱われる。ここに及んで今日われわれが常識として受け入れているバカンスがほぼ実現したといえるのではないかという印象を受ける。この時期になって、組合の要求には労働時間の短縮が前面に押し出されるようになった。それ以前ももちろん要求はなされていたのであるが、それはむしろその他たくさんの要求項目の一つとしてであり、決してメインの要求項目ではなかった。

しかしこの期間の、とりわけ 60 年代の経済成長によりフランス人のバカンス志向は飛躍的な高まりを見せたのである。51 年にはわずか 800 万人だったバカンスを享受する人の数は、66 年には 2,000 万人に達した。14 歳以上の国民に占めるバカンス客は 61 年 34%、66 年 39% であり、74 年にはほぼ 50% を達成した。61 年から第四の時期に入る 81 年までの 20 年間に少なくとも年に一度はバカンスに出かけた人の数は 3 倍に増え、バカンスに費やされた日数の合計は延べ 4 億日から 8 億日へと倍増した。

このように総体的に見たバカンスの普及は疑うべくもないが、職業的、階層的にはきわめて均衡を欠いたものだった。60 年代についてみると、農業従事者は 10% しかバカンスに出かけなかったのに対し、上級管理職や自由業の場合は当時でもすでに 80% を超えていた。同じ時期に商人や労働者は 40%、一般サラリーマンは 60%、中間管理職は 70% だった。今一つ興味深い点は居住場所によるバカンス出発の多寡である。60 年代のある調査によれば、年収が 6,000 フランから 10,000 フランの間の平均的な年収のパリ市民の 67% がバカンスに出かけたのに対し、同程度の年収の人口 50,000 人以上の近郊都市の住民では 45%、さらに 20,000 人から 50,000 人の間では 42% であるのに、地方ではわずか 15% という結果が出ている。しかしその後地方の都市圏でもバカンスに出かける人は徐々に増加していった。やがて都市圏の上昇率は緩やかになったが、その頃から村落の住民でバカンスに出

かける人が急激に増大した。

バカンスの普及といっても当初はかなり緩慢なものだった。休暇が増えてもバカンスに出かける前に現在の生活環境をより快適なものにすることが先決だと考える人も多かったのである。バカンスに出かける代わりに、彼らは家に手を入れたり、家電製品を購入した。とりわけ北部やロレーヌ地方の金属労働者たちのバカンス参加は遅かった。法事のために何日か休む他には、彼らは休暇を日曜大工や家の修理に費やしたのである。しかしこの地方でも、バカンス期間が三週間を超える頃からよその土地に出かける人が徐々に増加していった。

大都市、とりわけパリの商人たちもバカンスには最も遅れて参加した階層である。彼らが出かけなかったのは経済的な理由からではなかった。しかし彼らも60年代にはいと時代の流れに合流していった。「夏休みにパリに行ったけど、めぼしい店はたいてい閉まっていました」という言葉がフランス旅行から帰ってきた人々の口から聞かれるようになったのもこの頃のことである。

キャンプが普及するのも60年代からのことである。もっともキャンピングカーを所有する家庭はまだほんの一部に限られた。キャンプは上流・中流階層よりも労働者やサラリーマンの間で普及した。こうすればお金をかけないで遠方にまで足を伸ばすことが可能だったからである。長期間の旅行においては、宿泊費の占める割合が最も大きくなるのが普通である。休暇期間の長期化に比例しない給料の増加に、比較的低所得層はこのような形で対応し、バカンス族の仲間入りを果たしたのである。それ以来こうした階層の人々もそれまであまり足を踏み入れなかった海辺にやってくるようになった。ボーイスカウトでキャンプに親しんだ人々が家族にそれを伝えていったこともキャンプの普及にあずかって力があつた。

何事も時代とともに移りゆく。キャンプも例外ではない。徐々にキャンプの高級化が進行していった。キャンプ用の土地を購入し、テントを張る場所の周囲にお花畑を作り、テレビ用のアンテナを立てて、人類の月面着陸だ

の、ツール・ド・フランスだのに見入る人々が出現した。冒険，訓練，自然との接触というキャンプ本来の性格はこうして失われていった。親の側が従来の意識でいても，快適な生活をキャンプ場でも維持したい，という子供たちの要求を拒むことの不可能な時代になっていたのである。キャンプのもう一つの進化の形態としてはキャンピングカーの利用がある。これは次の時期には非常に大きな比重を占めることになるだろう。

【第四部】

第四部は75年から今日までであるが，正確には本書の発行された96年の前年あたりまでを対象にしている。70年代半ばは世界的な不況下にあり，もちろんフランスもその例外ではなかった。しかしながら驚くべきことに，75年度にバカンスに出かけた人は74年よりも増加したのである。当時フランスでもこの事実には大きな注目が払われたのであるが，これはバブル崩壊後も海外旅行に出かける人が増加し続けたわが国を彷彿とさせる。移動の手段としてはオイルショックによるガソリンの値上がりや，道路の殺人的な混雑，交通事故の危険にも拘わらず80%近くの人が自動車を利用した。行き先にも大きな変化が生じた。64年の統計ではバカンス客の35%が田舎に出かけ，海に行く人は33%だった。10年後にはそれが逆転して海に行く人41%に対し，田舎に行く人は30%になった。バカンスに出かける人は本書で扱われている最新の資料では94年現在62%である。老人，病人など肉体的な制約や経済的な制約によりバカンスに出かけられない人々，また健康状態，経済状態の如何に拘わらず旅行嫌いの人々の存在を考慮すると，こちらあたりが飽和点かもしれない。フランスといえども，どこにも出かけずに家で静かにバカンスを過ごす人は少なくはないのである。

1982年に5週間の有給休暇法案が成立したことにより，一度ではなく二度以上に分けてバカンスを消化する傾向が増大している。もちろんまだ一度に取る人が75%と圧倒的に多いけれども，二度あるいは三度に分けて取る

人も四分の一近く存在していることは注目に値する。

外国へ出かける人が少ない、という点もフランス人のバカンス活動の特色の一つである。ドイツ人やオランダ人は 60%、ベルギー人やアイルランド人が 50%、デンマーク人や英国人は 40% もの人々が外国でバカンスを過ごす。それに対しフランス人は 20% 以下である。オランダ、アイルランド、ベルギーといった国々の場合は国土が狭いから、という理由が説得力を持ちそうであるが、ドイツや英国はフランスよりはやや狭いにしてもヨーロッパでは大国に属する。著者はなぜこうなるのかその理由を挙げているわけではないので、筆者なりに考えてみよう。筆者としてはフランス人の中華意識というキーワードでかなりのところまで説明できそうな気がするのであるが、いかがなものであろうか。フランスほどいい国はない、という意識が多くの人々に共有されているということである。経済的な理由によってはこの現象を説明することはできない。なぜならフランスが上に挙げたいくつかの国々に比べて経済的に貧しい、という事実はないからである。

バカンスに出かけた先での滞在の形態にもお国柄が現れる。ホテルに泊まったり、セカンドハウスに出かけたり、ペンションに滞在したりと様々な形がありうるけれども、比較的新しいものとしてはキャンピングカーの利用がある。フランス 17%、オランダ 40% 以上に対し、ベルギー 12%、イタリアにいたってはわずか 11% のキャンピングカー利用率であり大きな相違が見られる。

最も古典的な滞在の仕方は親戚や友人宅に泊めてもらうことであるが、この方法の利用率も国により大きな相違が存在する。ドイツ 35%、英国 20%、ベルギー 13% に対しフランスは実に 43% である。こうした数字についても著者は詳しい説明を与えてはいないので筆者なりに考えてみると、その最大の原因は農業共同体の人間関係が最も濃密にフランス社会に残存しているからではないかと思われる。これには親戚や友人のところに泊めてもらって宿泊費を節約したいという意識も働いているかもしれないが、それにしたところでそれなりの人間関係が日ごろから維持されていない限り不

可能だからである。

この章の終わりでは様々な理由によりバカンスに出かけられない人々が取り上げられ、考察されている。周知のごとくフランスには旧植民地を中心にした外国人労働者が多数存在し、大きな社会問題になっている。大都市周辺部の貧困家庭の子供たちにバカンス体験をさせる試みがなされているが、きちんとした生活習慣を持たない子供たちがマナーに適ったバカンスを過ごせるはずはないのである。子供たちに振り回される大人たちの苦闘が述べられ深刻な一面が紹介されている。

最後の「結論」において著者は現代のバカンスが若さと活動を志向している、と指摘している。ぶらぶら歩きの代わりに、何かの習いごとをしたり、散歩の代わりに運動をしたり、息抜きする代わりに研修会に出席したり、という具合である。「個人の向上というイデオロギーがバカンスに自己実現の色合いを与えているのである。」

レジャー産業は通常大きく三つに分類される。一つは仕事や労働によるストレスの解消をその目的とするリリース型レジャーである。酒を飲んだり、テレビを見たり、音楽を聴いたり、ゲームやギャンブルをすることがこれに属する。第二は非日常的な活動によって次なる労働への意欲や活力を生み出すレクリエーション型である。スポーツや旅行がその代表である。第三は自己実現をその目的とする自己啓発型。これには様々な創作活動などが含まれる。わが国の余暇の過ごし方を見ると、経済の高度化につれて余暇の過ごし方が第一、第二、第三という順序で変化してきたように思われる。もちろん第三タイプのレジャーが主力になったからといって前の二つのタイプのレジャーが放棄されたわけではない。またこのレジャーの分類自体便宜的なものに過ぎない。第三のタイプのレジャーにも部分的には第一、第二の要素が何がしかは含まれているからである。

著者の指摘通りとすれば、フランスでもわが国でも人々は第三のタイプのレジャーを、ということは第三タイプのバカンスを目指していると言えるのではないだろうか。これは相当程度まで普遍性を持ったバカンス進化の過程

かもしれないが、それを論証することは本稿の趣旨を大きく逸脱する。

【おわりに】

本書にはわずか二百数十ページに百数十年以上にわたるフランス社会でのバカンスの位置づけとその変遷が四部に分けて概説されている。第一次大戦まではバカンスといってもそれは大部分の庶民にはあまり関係のない、いわば特権階級の年中行事に過ぎなかった。大戦後今日までのおよそ 80 年が全国民を巻き込んだバカンスの歴史ということになるが、第三章で著者も指摘しているように、労働者階級までをも巻き込んだ形でのバカンスということになると 60 年代以降のことであり、「次のバカンスを楽しみにしてそれ以外の時期の労働に耐える」と言われるフランスのバカンスにしても、その歴史は意外に新しいものであることに驚かされる。わが国でバカンスという言葉が使用されるようになってからすでに相当の歳月が流れたことを考えれば、彼我のバカンスの歴史は質的には大きな相違があるにしても、年代的にはそれほど大きな隔たりは存在しないと言えるのではないだろうか。

長期にわたる歴史を小冊子に詰め込んだため記述が多少無味乾燥に流れたという印象を与える個所が散見されるけれども、それは本書のような概説書に不可避の欠陥であろう。多くの旅行会社や旅行クラブ等の設立の由来の記述に関して、とりわけそうした印象が強かった。しかし、それは筆者にとって馴染みの薄い名前が羅列されていたためであり、それらの名前を日ごろ見聞きしているフランスの読者は別の印象を抱いたかもしれない。

本書はフランスにおけるバカンスの歴史に関して先鋭的な分析を行ったというよりは要領よくまとめた概説書という性格の強い著作である。上に挙げたごく一部分を除けば、特に読みにくい個所はなく、むしろ記述は平明である。また膨大な資料をこれだけ手際よく整理した著者の力量は称賛に値する。本稿で筆者が紹介できたのは本書のほんの一部分であり、興味深い事実でありながら紹介することのできなかつた項目が少なからずある。本書の魅

力と価値を正確に伝え得たか少々不安が残る。

本書には8ページにわたってグラビアページがあり、15枚の写真や絵が収められている。もっと多く収録してもらえればより楽しい読み物になったものと思われる。もう一つこの書物には索引がないので、検索に著しく難儀する。これが本書の最大の欠点である。内容豊富な本書であるだけに惜しまれる。